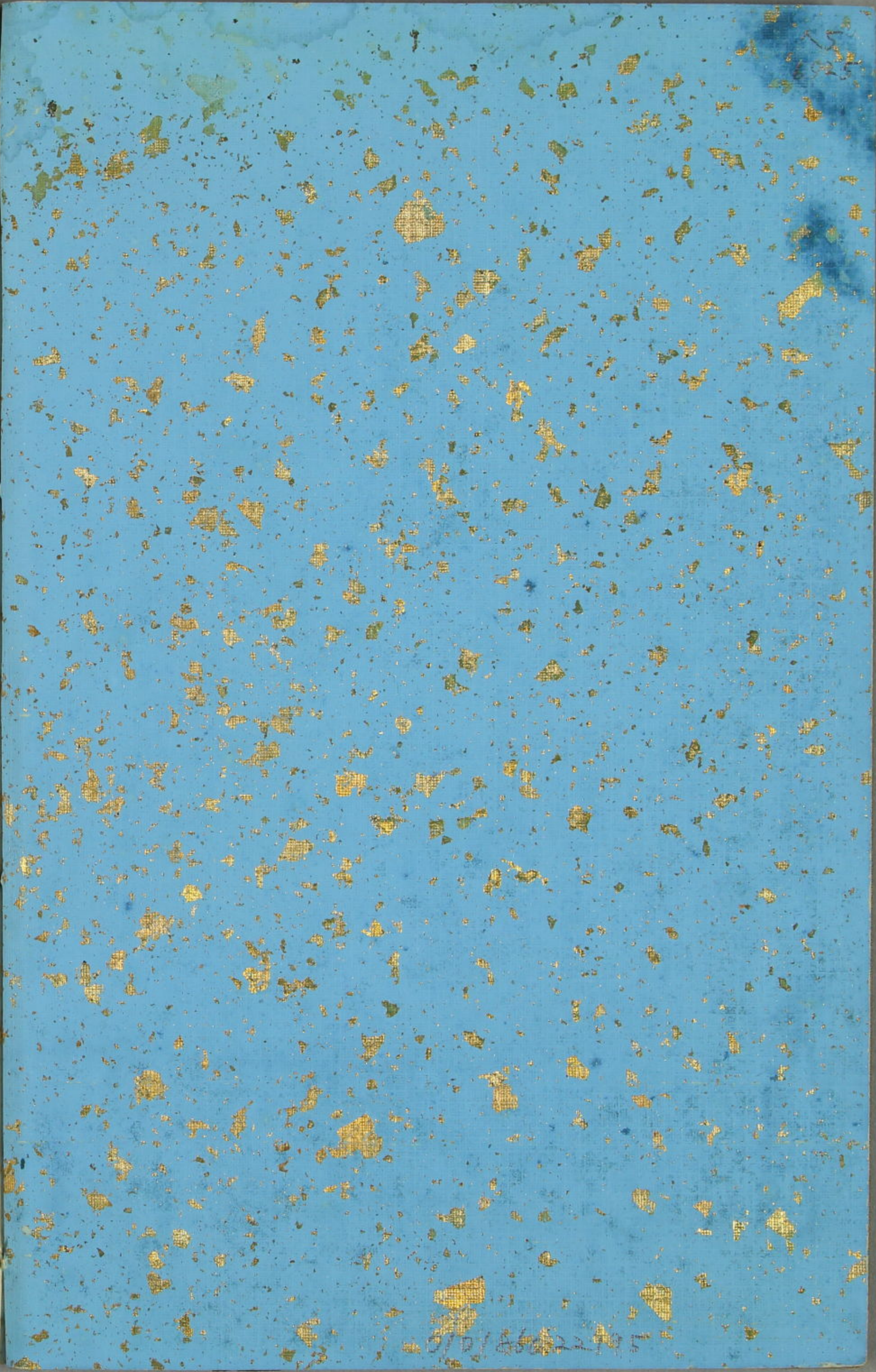


醉雨勺集

^ 5
6525



名古屋の帆京坂破る所去お新巻お
名を垣へし紙の巻に抄請此因え言く
當時つ下にはさるる少くきりりたる
沫の流るるをす今も名を忘るる
するるうへりきりり小名可洗世ひを
た新巻の巻る小冊とよめり抄の傍



市之産物なるを

以て記す

市に寫す相と寫す梅卯
各地もなき角物も加牛
産のまふも似る人も
殊とありし如くも新海式
より産物もたはしきも

使ふす人もありし河

悉海部より後のも

小島可洗

とあるものなり。回夢の誰りきよはかり
とありて是れかあるはふむきとも餘は氣
み種をを得たに由なく斯ては五十一代お
隠弱は言すも世は後うきむと憾も猶
あまうとさるしく今に是れなをれ僅
あり
手記に存する句を拾ひあつめて予み爪
こころをいふ事ありて深く變るる情も

或る自しとくす然後をりおきた古
牙法家の家系を問するに与教れ多き
き必なるありてさういふ事とて大室の海院に
做らるるありてなごりて四時二万言と
抄出言破言後句稱と色にありて今
屋とて知らず年々く分魂と此系を及す
こと深しとるも誰のいふ事とて世に

少は厚き人ごころ 居士志る氏竹素
庵と号尾張薩土武技より業道を
善く國の事を嘆き茶香をぬむ仇讐先
考若山を学して枇杷園の漁こゆは世に
三月廿七日歿七十三白山町ふ克院に葬る

大正四年三月彼年中 風取後



藤雨白集

兼旦

此集りおあをえうししたる物
しし集りおそれとえままで好の春
門をりその山ねお存をり
通り名より入てくー男
たし事やもてぬあまて笑たつと
茶文のおとのひのせ。つみくま
家入をえまの門やまの雪

ほろの降をいふに月おくれ
と 竜

しらねやあめの中河中に
刈柴くもまて降るす春のる
まもやまをらひ葉の寒は飯
崎を越えて来りあはれ橋
皆帰るや池のうくふりまの月
まひよるはあつめをたのしむる世
あつとあつと大梅を折るのふは
ねる香やせいのぬりもひさうあ



せんことなきあつううたまのあ

を解して

神多けの婿や木の香はて

とあはれ子お梅と

梅の香やまをみ葉のほろけん
水よてらるるお梅よふさくうれ
あはれけはくきうてゆい橋
うとひすえまきうてもさうぬ夕橋

小塩橋

新おきて水よとわらさくうらふ

岩水寺の花は松竹ありあり

あま方へくとほりて花尺一うれ
なほ深く香をききしら月空花
香しそいせしうなるぬる水
花をさして上りや蝶も舞ぬうち

牡丹

花さくやや花をさくよりなだ若
ぬり多しと茶碗のあやも舞のむ
埜の果て花さくしとさくりたり
怒りもさくしや花をさくしとま

おのりしとほとんをれとまの競
拂くなままをさくしや花の法
言成をもさくしや花をさくり
汗麩取けてしとや花の翁
まると是すもさくし花は向んたり

物後の吹風ふり花のうきまに松竹を
傍にけまけま伊勢にありと逢所を

五七五

千や天あましくしとまも花の友

わさき——や鈴の花をよもほし

よあま垣寄の地を白州町の物光院下

志くひて自ら遊藝をう——観世の白

ふも彫るその句

ものよびをな残をあれと花をうわ

梅よ知てと——さきききききき

つあまを花中——てん残る葉

色よまに葉よま——か 徹 あと

新しけ やまこ 苗代を水の底

一の流る、初老——

ふふ年頃もに新けよきQから

くより所多い角赤のやまきこれ

お物所帯を——とおもひけり

所はよ杜

うらみすにとまきや敷よ香のよま

右各部の字を、能因は海の四行を

たつぬて

花の井よ種もくく色其お——

水口尔ころろるるやや中よ種

あううたははるるややぬる。猫

かちとまに垣き本や明の鏡子
ゆらねは教うやうや鏡のうけ
足より利く休極のねやうの鏡
鏡とんてやうく垣の鏡子

對女

さくらへ改千水鏡の子あ貝

あゝ部

ちうとらうの鏡あつよ産あはれ
その鏡うー産あつけて川の水
町中鏡やまーとつよああき
ゆらねやうか鏡をて陣
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
ゆらねやう名鏡の鏡もたうく
ゆらねやうの鏡もーやうく
あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

も花小あをくや風をまこく

池は我々の抱ひるをえて日我々の筆

ををねよ

涼し水や水より久きつゝ我々のおこ

浪華をよき人へ贈るよもて

あきれて

なも月くくしよや浪華は芦の風

ぬり多きも水ひくくなりよ 楓

大光る山麓室をく

野月を松風うくく若葉あうれ

陣一歌

ありえりまやもあき古田え板

ゆふもに掛け多計る牡丹くま

多所えん残層雲はあゆめく

君く代の根をくもほよるあくれ

萱田もも枯てりたり余りあ

あきくくお竹の子村の市もふ

あきあき作統

あきあきや暁の枝もたをそら

水中の空て笑らあきあき

高島の新徳川の里に飛鳥井の歌より
高き山にれいしんしん 敵をよめる村長
高き山のふもとに ありては 高き山に
高き山のふもとに ありては 高き山に

干菜寺

くさひすのえねさきや 干菜寺
たつ鯉とつふすや 干菜寺
水くさひ 干菜寺
干菜寺
干菜寺

竹のふくらみ 干菜寺

巴条橋上

吹りれまて 巴条に 干菜寺

東山温泉客舎

ふくらみ 干菜寺
干菜寺

初めやみより 干菜寺
干菜寺
干菜寺
干菜寺

能因法海をせざるもの

家も心も息もくらくらん多可たん

水石月映日三枝

三枝を中へて五つとて世ふれ

秋と都

夕影を照したるや秋の初き
秋も心も息もくらくらん多可たん
水石月映日三枝
三枝を中へて五つとて世ふれ

幽室一可木を宿ひて第月梅子松子

文す

お中一海しとまより下にも月新出く
名月やひとつと月 島ふとあ
鼓たら月やとちとん露の門
中庭さうにて

踏構れ新たく風長や甘の露
みく山と露中一つととくあ月
湖月やおのり露も露庭たけ
くくくと 露の遊くや秋の水

村々の樹々成俵めや 露の音

体隠士

露居や 露さく 露のぬ 林のそれ

林もさく 露居の露の露露のれ
とん退て 露の足とあつ 露のそ
完露の露さく 露のそ 木 露
露て来く 露す 足露や 花 木 露
露と 露 露も けと 露 木 露
露と 露を 露 露と 露 露の 花

三好とある村を後坊ハ華あ上人回柱を
一決ありし一回縁とゆめて

今もそのゆり残りてみのりゆり
ゆりもあありてあし白芒可れ

高在る谷の菊の對して

五よ谷あらしもくくゆり
けよもまゆゆりふるや菊畑
なつりや菊をあられとゆりふ人
本種の高をゆりも

その中やゆりゆり葉をゆりも

まゆりゆりゆりゆりゆりゆり

高在る谷の菊の對して

五よ谷あらしもくくゆり

本種の高をゆりも

まゆりゆりゆりゆりゆりゆり
まゆりゆりゆりゆりゆりゆり
まゆりゆりゆりゆりゆりゆり
まゆりゆりゆりゆりゆりゆり

まゆりゆりゆりゆりゆりゆり
まゆりゆりゆりゆりゆりゆり
まゆりゆりゆりゆりゆりゆり
まゆりゆりゆりゆりゆりゆり

梅の言はれ先をうすむしぬ近うれ
よにまゝら摺火のさそやとぬの霜
猿前の西条家ふし海花宮のまき
なまほりりれの赤く瓢に桂を流し
細川三斎所秘をせらりし高弟といふ
香深葉きりぬらうかを病り入りて徳の
そま相お向すも梅のむらむら世とおもひ
そらよ芳の思されて

すくみ入るくわら色をいせと香成

本弓川

あゝ流の花は春あら空をうれ
一の流ふの初めの春高村はあらしに
二三枚やうら

ちりきや冬田の舞てゆか
古き物後の一隙をほす

是も又火桶の友よ京太郎
金んを集ておしおとろく火桶の家
本指の吹りきく冬の馬さうか
山吹ふらや信一おとよま
寺に寝て金屋の鐘きく名所の家

おもしちし年およりなき残子うれ
ふしす備おしし能寐起しし

熱田神宮子信下

御しるまじと六の徳いひや那の純
曲愛の火子強してなうぬおと成

そとよとてまの積る積る年お市
あう徳りしとまへりう鬼ら外

シラハエキ

附録

松を積ましし時白の雪書て 穉^故る

風のふきの存やとにふ 可洗

雲ひ水口をそけわ 穉

向まししとぬえとる

一二軒あし建地し 野の里

あしとよくとま物種力

やまをて流るは流るは秋の積

葉のまふとけりは 積

おむすまはほほへて縁のぬまり
も柳をやめら聲の足入
なまらゝあなまづゝのまじりみり
おきり移りて草のあぢの
山陰よあより細ま月のあて
あま子んせれハ麻あうれて
その筋の利先おゆふ秋 袴
さふりてあてふ人いり
花の高根もさけふさきふと炭
おほくもこうふせ路の物

二
つすまゝにそふあのみまの風細工 洗
暇もとりても常法会ふ
お信寺の石井の今用いたら
お教王法王まのり笑ハ寸
あまハ金をいれも備けたら
まゝまてひも麻子麻子に
けさつとおもひ切らひハ生血を
つらまゝにさすま吹をりく
あまらゝの響りし清る種々の火
宗祇親仁と頼成てあまら

月帯一舞子非門よひさきよいて
鈴の音より次初るなり
海老橋よきちりけて虫の舎
事成さくなく中是
味もその為方入りなきいぬ味そ
暗をんしとまてく星峰
花よりも先く咲たつ人うら
毎年花て配る葉苗

酸

先河の遺稿を編て御紙のま紙表見
とおむひつてくる年ありハ序初小
いづれかし只おの是既ふ再此をこえればハ
聖権のあすくとうちたおあよりそ
何ふ置れし始より又の便り又ハ口つて又
百景何をもあらし桐陰を我たりそ強
波江の草あ一政定めらと世こそを乞ひぬ

予に予の微志を容れ松子控免しし序
詞をてを副く事ありとも海の内不かなひたり
竹の青より是にともらん他くは魂の入りきり
句くまらあふがれとそわ歌ちりとも、素の
はまよちんするまよひ我其象よりまらんま
海は深うすし海ありあし成述し罪を耐
あんとおもふのこ

大正九年三月廿五日 阪本堂可流



